



鈴木 賢次

# INTERVIEW 01

## —まず先生の専門分野をお聞かせ下さい

僕の専門分野は歴史・意匠論ですね。その中でも日本の建築史、近代デザイン論についての研究を専門としています。それから、実践としては、建物や街並の保存・再生なんかも手がけてきました。保存とか再生っていう分野は仕事と直接的に結びつけることは難しいんですよ。これまで、スクラップアンドビルドっていうのが普通で、新しいものが良いという風潮が続いてきたでしょ。その中で古くてもいい建物があるのに潰されてきてしまった。そういう大切にすべきものを残したいという活動が、社会貢献にも繋がると考えています。実際に僕も所有者・生活者の方と一緒に保存、再生という実務を行ってきました。

## —具体的にはどのような活動をされているのでしょうか

大学で研究を続けていた時には、東京の蔵造りの商家を解体して、大きな公園に移築したりだとか、そういうことにも取り組んできました。最近ですと、東村山に全生園っていう、ハンセン氏病の元隔離施設で、今は解放されてるんだけど、昔はその中が、一つの国みだった。その中に病院はもちろん、住居も学校もお店も、あと教会とか、宗派ごとの寺まであったりして。ある意味、日本の歴史の負の遺産のような、そういう施設の中の建物を調査していました。こういう施設が過去に、そして今もあることを忘れちゃいけないって意味で、残す価値があることを世の中に知らせていかなきゃならない。そういう活動もやっています。

## —今回プロジェクト（12-15P参照）としてあげていただいた柳窪という場所はどのような特徴のあるところなのでしょう

柳窪実測調査は、「東久留米の水と景観を守る会」というNPO法人に依頼されたのがきっかけかな。ここは東京の東久留米市の中にあって、青梅街道が横を通っていて、明治から昭和初期にかけての景観が残っている集落で、黒目川の水源地を中心として発展してきました。そこは主に農家をやっていた4つの本家とその分家数十軒が集まって構成されていて、それぞれの屋敷はどれも結構広く、その屋敷の中に屋敷林っていうのをそれぞれが持ってるんだよ。屋敷林は防風林や防火林としての役目と、その家の格式を表す意味もあって、昔は大切にされてた。昔はこの地方にもっと広範囲に渡って屋敷林が存在していたんだけど、土地の相続税などによって維持が難しいんだよ。相続税の問題とは、遺産の分割のためどんどん土地を切り売りしてって宅地化され、屋敷林が減ってしまったんだよね。それに落葉樹だと、葉っぱが全部落ちるわけじゃないですか。その掃除とか、剪定とか手入れのためにお金もかかるし。幸い柳窪の屋敷林は、今は東京都の保存の対象になってはいるんだけどね。とにかく柳窪はそういう屋敷林がまとまって残っている。農家の屋敷内には、明治から昭和の民家が、部分的にはリフォームとかはされてるんだけど、外観や主構造がよく残っている。これだけまとまった民家の集落が東京の中で未だに残ってるっていうのは、本当に珍しいんだよ。

## ■ PROFILE

1970年 早稲田大学理工学部建築学科卒業  
1979年 早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻博士課程 満期退学  
1987年 工学博士  
1984年 日本女子大学家政学部住居学科専任講師  
1987年 同 助教授  
1995年 同 教授

## —保存するということは本当に難しい課題ですね。東京で他にそういったところは残っていないのでしょうか

所有者が残したくても、そのためには莫大なお金がかかるから難しい。本当は市も保存に参画してほしいんだけど、行政もお金がないので関われないってのが現状ですね。だから結局、遺産分割やなんかで解体されてしまう。本当は自治体のサポートが欲しいところなんです。例えば京都の祇園とかは、観光とかの魅力があって、人が放っておいても集まるような所。そういう所はそれでいいんだけどそういう観光化ができる事例ばかりじゃないでしょ。だから保存だけじゃなくて、再生ということが更に重要になってきます。

## —現代の都市では日本中どこもブチ東京のようで、伝統的な木造建築は見られなくなりましたが、そういった古い建物と都市が共存することは難しいのでしょうか

日本の都市は今まで何回も地震とか火事であって、昔ながらの街並みもどんどん取り壊されてきました。そして日本の現代の街並みは一律の価値で進んできてしまったっていう経緯がある。僕としては、保存といっても全ての古い建物をそっくりそのまま残せて言ってるわけじゃないし、近代的な街並みを伝統的な街並みに戻せて言ってるわけじゃないの。だって今から昔の生活に戻って言ったってそんなのできないでしょ。我々が手に入れた便利な機能とかは今更捨てたくないでしょ。都市も便利になった部分はなるべくしてなったのであって、そこを不便な昔の生活に戻せて言ったってね。でも今でも残ってる街並みっていうのは、それが価値あるものであったり、便利さを上回る良いものだから残っているわけですよ。そういうものは人間

の豊かさにもつながってくるし、現代の都市の中でも生きていけるものなんじゃないかとね。京都も駅周辺は近代的になってしまったけど、西陣みたいに町屋が残っている一帯もあって。そういうふうには新しい都市の便利さと、そこの地方の特色を活かした伝統的な街並みの両方が、それぞれの魅力を保って並存すればいいなと思っているんです。

## —先生は日本建築史などを教えていらっしゃるんですが、学生にどんなことを学びとってほしいとお考えでしょうか

僕が教えてるのは、木造建築の基本なんです。木造建築は和風だけではなく、洋風の物もあるでしょ。デザインというのは新しいことを工夫するということで、家具にしても木製の物もスチールの物もあるように、その材料の特質を理解して活かして工夫することが大事なんじゃないかな。

## —大学と地域が関わることでどんな効果を期待していますか

地域の生活の場を経験するということではフィールドワークが良い体験だったんじゃないかな。地域の方から見ると、NPOは高齢者が多いので、大学生のような若い人が参加することで注目を集めさせて、興味を持たせるきっかけとなる、ということだけでも意味があるんですよ。それにそうして調査した記録というのはきちんと残ります。その実測調査記録はオリジナルな研究の始まりになります。初めて実測されるような家ばかりです。学生にとっても勉強になるし、非常に有意義なことですね。住民以外の人に関心が広がれば、市の援助などにも結びつく可能性があるんで、相互にとってメリットになるんじゃないかと考えています。

真の価値を活かす